

№1070, BASTOS, 9. de NOVEMBRO de 1970, O PROGRESSISTA, REC. Nº 2.635 SAO PAULO, AP. Nº 4.576

バストス週報

第1070号
昭和四十五年
十一月九日
発行

Director: Koiti Mori
Redator: Shion Oda
Rua. Pres- Vargas 188
C. Postal. 112
Fone 40 BASTOS C. F.

Annual Cr. # 18.00 Adian

霹靂 45

展暮風景

名所古蹟を見学観光して歩くと心が晴れ、ほのぼのとした心算になるものである。年中事務机で書類とにらめっこを繰り返して、箱の中のような錯覚に陥っている生活をして、時たまリオの風景に接したり、ミナスの山嶽を眺めたりすると、眼前の壮麗な展望に云う可からざる快感を味わうと共に、一種の開放感にも包まれて、爽快さわまりなき心境になる。

ことに歴史の影を曳く古蹟などを訪ねると、心の幕に映るフィルムのように、物語りが流れ出て測々と胸に迫るものがある。

昔、長篠城が武田勝頼の軍に包囲されて危急を告げた時、城内の鳥居強衛門が単身城まぬけ出して川を渡り、岡崎に待期していた織田信長に援兵を乞う話がある。城をぬけ出した強右衛門は川を渡ろうとしたが、網が張ってあり、さわると鈴が鳴る仕掛だ。夜中丸太を流して敵をさがむき、遂に自ら流れを泳いで網を切り破って脱出したという。少年の時だったから、こういう話にとても興がのる。

その後長篠城址を見物する際りがあつて、強右衛門渡川の現場を、川幅は二十米あがなし、兩岸や河中にも岩がごろごろして、水勢が激しく、岩にぶつかつて、しぶきを上げるとは、い程の水量が少なくて泳いで渡るなどという程のものではない。どうも実感が湧かなくて、だが、それも表をかぶつた百姓態の武者が岩から岩へどびうつて脱出してゆく姿を想像することは出来た。尚爾述の烟を探すと矢尻や筒の破片を発見するといふおまけもついていた。

又録倉へ行けば鶴が八幡宮の石段にかかる側の銀杏の古木を見るであらう。その木の影に別当公暎がかくれている。八幡宮に参詣した源実朝の帰途を推して切つたところ。その場に行かなくとも、その話だけで結構であるが、実景を見ると、又一としお感慨を催すものである。日本のような歴史の古い国は行く越行く越が史話や物語りの連鎖で、心の配り方では興味津津々として尽きる趣を知らぬ。昔の話でも他人の事でも、その様に史

伝統と性能で世界に誇るミンシンの王者
大量に人荷いたしました。

MINI PUNTO 666 六六六
GIGAZ 667 六六七
PUNTO DE OURO 660 六六〇



長期月賦販売の御相談に
応じて居ります。
特に現金御買い上げの方
には、タペラの二〇%割
引をして差上げて居ります
御利用下さい

CASA TARODA

太郎屋三三郎

遺跡に人の心を刺くものがある。ましてや肉身の者となると、その感が深い。南洋の慰地で戦死し、或は硫黄島で全滅した軍人諸氏の遺骨が風雨さらされていくと、きくと、惻隱の情究わまりない。その遺族たちの心を汲んで、戦後二十年近くたかり、探骨隊が出かけて何百何千の遺体を収容した。誰の骨だか知れたものではないにしても、野ざらしにしては措けないであらう。

アメリカ人などを鬼畜といつて当時罵っていたが、アツ島で玉砕した日本兵の死体は、一々番号を付して遺品もろとも脱水袋に納め、アラスカのツンドラ地帯に埋葬してあった。戦後これを知つて当局が受け取りに行き、その丁寧さに感激したという。

肉身の戦死した場所へ態々出かけ、その辺の土をもち帰る人もあるという。その人たちの傷心にふれると、理屈抜きに心を打たれる。数年前聖市アラケの墓地へ一知人の展覧に行つたことがある(実は墓地見物に

に行つたわけだが、聖市一流の墓地だけあつて、死者の爲めの公園都市の観がある。その日は、死者の日だつた。整然と歩道の両側に墓が並んでゐる。墓といふより、死者の家で、地下室共に二階建のような感じで、日本の墓地のような幽寂とした面影はどこにもなく、どこからか音楽でも聞こえて来そうな明快さである。ふと一角まがった処に小さな墓標があり、その傍に踏みこんで片手に翳燭花束を墓前におき、年の頃三十三と思われ大男、黒服を着て連れもないうしし。その後を通る時、思わず歩みをとめた。赤ら顔で栗毛のその男は消然として小声でお祈りをしてゐるのであつた。お祈りだかつぶやきだか判らぬが右手で大急ぎで何回となく、十字を切り、声は明らかに泣き声であつた。涙声ときれいごとに書きたいが、シマグリ上げる程の声である。多分新婚の妻君か、苦勞を共にした母親か、断ち切れぬ恩愛の伴に、只泣くことによつてのみ心の慰めがあるものであろう。滂沱として流れる涙を拭いてもせず、思はずが如く、絶るが如く嘆声尽る処を知らない。涙を人に見せまいとする日本人の男子には、とても真似の出来ない悲嘆振りであつた。

知人の墓を探しあて、墓地をざつと一巡して戻つて来ると、又先刻の泣き男の後通つた。彼はまた踏みつづけ、右手を額に当ててしくしくとすすり上げていた。あの広い墓地は花に飾られ、多数の墓参者で賑つていたが、彼のように淋しく嘆く人は居なかつたようだ。まるで、母の死骸に取り絶つて泣く子供のような感じだつたが、彼が大男であつただけに異様な風景であつた。あれから二十年もたつたであらうが、益になつたといつても、声を立てて泣く墓参男を思い出すのである。私は肉体を離れた靈魂などというものは、目に見えない存在で、しかも居所不明の気体のようなものだ。そんな靈魂をわざわざ墓の前まで出かけて拝むなどということは、単純な信仰だ……と思うがと先週の本誌へ感想を洩らした。しかし今日(十一月一日)世間並の墓参に出かけ、両親の墓、知人の奥津城に合掌してみると、地下ではすでに一塊の骨と化している物体に合掌することの根拠のたよりのない……というような追想の場として受け取つてゐる自分を発見するのである。自分の両親がカトリックの信仰のように煉獄の苦しみを受けてゐるなどと思われないし、行く処へ行けず、魂が迷つてゐるとは毛頭考えない。私如きものの祈りで亡き魂が浮ばれるなど考えたことはない。只思うことは、生前充分な扱いをしなかつた自分の足りなさを詫言ひる

ぐらいなものである。今なら、あの時よりいくらか増した孝養の方法もあつたらうにという一種の悔恨である。私の墓参の真情といえは大体そんなところである。僧侶に依頼してお経を上げて来い、そのお経の功德によつて極樂の指定席に入れてもらえるかどうか、一切向う委せである。

今日(十一月一日)展墓風景で特に感したこともないが、立派な墓が統々と建ち、墓地全体が朧ろい感じに充ち満つていた。無縁仏も多いが、さまざまな墓石が花輪を二つも三つも帽つて、香のかがりかそこはかとなく漂つてゐる。

死者を大切に取扱う、墓地を美化する、この精神、又は思想は先祖から受け、子孫へ伝えられるもので、やはり教会や寺院の感化に負う処が多い。人々の経済力にもよるが、美しい墓、立派な墓は地下の骨に着せる晴衣であると同時に、そういう墓を持つ人の心の誇りでもあるだろう。

◎墓探し当てて拝みし旅の人 糸音
妻や娘に顔をそむけぬ泣かざると
心に誓いて来つる墓前に 勝雨

おしらせ

生長の家講演会

日時 十一月十一日(火)夜八時

講師 柳瀬喜郎先生

場所 バネトス生長の家教会

私は喜びと熱情を
もつて前進する

(谷口雅春)

ラオスの高原地帯



タクシートの騒音がホテルの窓越しに響いてくる。近郊の農村やタイ国境から、野菜、果物、米、パン、鮮魚、干物、鶏、大トカゲ、午豚肉そのたもろもろを満載して、毎朝パクセの「朝市」へ集ってくるのである。

市民たちは五時前から朝市へ、一日の買物につめかける。市内の商店も、日常雑貨、書籍、衣類や布地、ナベやカマ、ラオ産品類にいたるまで、路上に店を出し、物価は猛烈に安い。バナナを買った。二十本ついた一房が三十キップ（約二十二円）であった。一本一円三十銭！値段は張るがアメリカタバコも抗生物質も、日本製化学繊維もある。とにかくなんでもあって、生活に必要なものはすべてそろっている。

パクセは約四万、カンボシマへの戦火拡大以後、にわかには風雲急となったラオス西部の中心都市だ。アトプー、サラバンからの難民は町に溢れ、戦況は日増しに広がりつつある。ラオス南部戦線を中心地、ポロベン高原までわずかの数キロ、ここでも今日も政府軍のT28戦車爆撃機がロケット弾やナパーム弾の雨を降らせ、機関銃や小銃が火を吹いている苦である。それにも拘らず、パクセの朝市のこのにぎわいはどうしたことであろう。

「狙いは新しい聖域づくりだ」
 パクソンはアトプー、サラバンが陥落した現在、燃え上るラオス南部戦線の最前線の町である。そのパクソンの町に向けて車を走らせた。朝もやの薄れて行くなかを、野菜果物を満載した小型トラックとひっきりなしに行き交う。

ところどころがパクセ、パクソン間のこの道は、軍争上きわめて危険とされている。この道をアメリカ人や、フランス人の乗った車が通ると、必ずといっていい程鉄砲撃されるという。ということは、一見のどかな、朝もやの漂う森やブッシュのかげで、パテト、ラオス愛国戦

戦の新しい日と銃口が、とちの音やを響かせていることを意味する。簡易舗装の路は山を起伏を繰り返して、かから、しだいにポロベン高原へ向って登りつめてゆく。インドシナもラオス道水とすると、ベトナムのメコンデルタやカンボジアの乾いた原野とちがって、地形や植物相が日本とよく似たたたずまいとなる。爽やかな朝の涼気とい、かなたにかすむ山脈とい、どこことなく信州の高原でも走っている感じである。

五月一日に始まった米軍のカンボシマ点ボロベン高原が燃え上った。それまで北部のシャム平原で大攻戦をかけていたパテト、ラオ、北ベトナム混合軍は、侵攻の情報がもれていたのは明らかで、四月二十九日には数年米包圍されていたラオス高原一帯に圧力が強まり、九月六日サラバンも陥落した。残された唯一の町パクソンが落ちるのも、時間の問題かもしれないという声を、ビエンチヤンでも聞いた。もし、パクソンが落ちると、パクセには野菜や肉類がほとんどはいらなくなる。一帯の農民たちが畑も家も取り出して避難してしまつた。

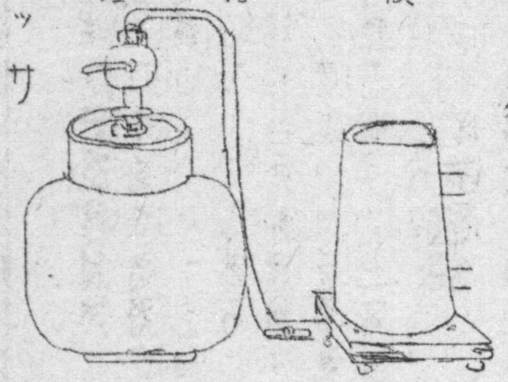
FUNILARIA SHIMIZU

ガス用風呂沸し器

新発売

一、二〇リットルの水が
 二十五分でわく

木炭より軽便
 点滅自在で
 すこぶる便利
 で経済的
 自転車修理
 並びに
 附用品とベッサ



清水鋳力店

ドッキ、テカシマス街、ロードピアリオ近

「狙いは新しい聖域づくり」と、バクセ政府司令部の若い情報将校は言っていた。彼の話を続けよう。「アトプーはメコンの支流セコン川を押える重要な地点だ。国境山地から流れるセウス、セカマンの二支流が、ここでも支流に合流する。これからの増水期に物資をイカダにのせて流せば、流水にカムフラージュされて空からの発見は無理だ。流れる物資はカンボツマ領内でメコンにはいり、そのまま北部へ届く。メコン沿いのステュントレン、クラチエが押えられていりのもそのためだ。もし、メコンの大瀑布がなくなるとメコン自身が使えればバクセ、チナムバサク、コーンも危いところだ。

勇敢だったのは民兵

サラバンもアトプー同様五年間包囲下にあり、事実上中立化されていた。サラバンをはさんで東西両側にホー・ルイトが通っていたが、サラバン守備隊はそれになんの影響も与え得なかった。政府軍も占領されることはあるまいとタカをくくっていた。サラバンが攻撃されたのは八日の明け方であった。午前十時頃、不意に敵軍に突入し、午後から夜も続き、九日早朝に陥落した。

バクセの軍司令部や米軍事情報関係者や避難民、負傷兵話を総合すると、戦いの状況は次のようであった。

サラバンを守備していたのは正規軍、警備隊、民兵をあわせて約二千人であった。市の西南部に陸軍の基地があり、南部を警備隊が守り、市内を民兵が警戒していた。市の東方約七キロにあり飛行場周辺には、もう一つの陸軍の基地があり、そこは約四百人の兵が守っていた。攻撃隊が何人であつたかは、きりしない。司令部では、六個大隊（約三千人）で押し寄せ、うち三個大隊（約千五百人）が市を攻撃したというし、負傷兵や引揚げて来た政府情報関係役人は、十個大隊（約五千人）はいたという。バクセのUSIS（米文化交換局）の若い役員になると、ぐつと冷めたく「多くは犠牲者で千人、セイビイ五六百人だろ」という。

攻撃は西方から開始されたが、始まるや否や政府軍は逃げてしまった。南部の警備隊は数時間戦ったが、そのうちに周囲は包囲されてけちらされた。市内の民兵は中心部に押寄せられた。これら市の市民は取り残された民兵、つまり郵便局員や、教師たちがもつとも勇敢に朝まで戦ったという話である。

戦いが一段落した九日の昼までに、約七百人以上の警備隊のうち八十人以上が帰ってこなかった。ラオス戦争としてはめず

お金の入ったボルサを落した人におしらせ

先週土曜日（十月三十一日）朝野菜売りのおばあさんが、アベニード附近で、ボルサを失われたらしい。そのボルサが見つかりました。

週報社まで御いで下さい
お心当りの方は、しらせて上げて下さい。

しい激戦であった。味方の死者は軍、警、民あわせて二百六十人。行方不明千人近い。敵の死傷者数不明。

アメリカ軍顧問の存在を確認

この戦いに関して、バクセの軍司令部はおもしろいことを言っている。数日前から敵の来襲を知っていた」というのである。ラオスでは其産軍は奇襲攻撃をしない。「事前に何日ごろ大軍で攻めるぞ」と情報を流す。政府軍は夜も眠らず注意して、いざ攻撃が始まると雲を霞と逃げまわってしまう。つまり情報を流すのは逃げ準備をさせるためで、その結果敵味方ともにムダな死傷者を出さずにすむというのである。

サラバンの陥落で、北ベトナムは大手をふるって23号道路を利用出来るようになった。とバクセ軍司令部はみている。この道路はセボンからサラバン、タテン、バクソンを経て、バクセに至る。南ベトナム、カンボジアへの補給ルートとして考えられるのは、セボンで23号道路には、バクソンの教マロ手前で道路をそれぞれポロベン高原を横切り、マイを通りカンボジア領へはいるコースである。

いままでにもサラバン西方を迂回するルートはあつたが、人間がや々と通れるほどの細い道であつたという。23号道路が利用できるるとすれば、これはトラックがスピードを落とさずにすれ違える広い道だから、補給の能率は飛躍的であるが、「いまやホー・ルイトは数本の単なる「線」ではない。ラオス南部のほとんどを含む「面」になろうとしている。平和への道がまた一段と遠くなった。」

若い情報将校はそう言う。肩をがっくりと落した。なお私達はここで無気味なうわさを聞いた。サラバン攻撃に中国兵が参加したというのである。政府軍兵士たちの中に「色が白く背が高い奴らが数十人いた。あれは中国の雲南省の兵隊だ」と言っているものが何人もいるという話である。

史的広場の回想

佐藤常蔵氏著「ブラジル風物記」より
ブラジル共和国の誕生と
サンタ・アンの広場



佐藤常蔵

せられるのは、あの広場にブラジル共和
国の宣言者デオドロ元帥の名前がつけら
れてありなから彼の胸像すら建てられて
いないことである。そして全く縁もゆかり
もない医学者ルイス・ペレトラ・バレ
ットの堂々たる銅像が存在するのは奇異
の観がある。

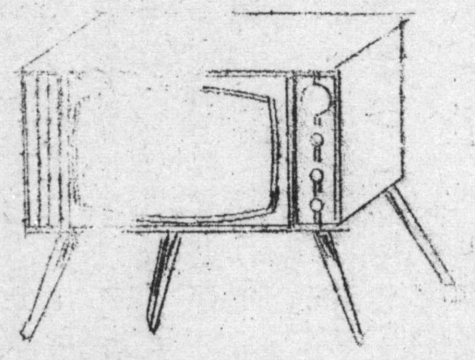
またブラサ、ダ、シブプリカとても同
じでデオドロ元帥の胸像はおろか、共和
宣言記念塔もない。もともとあの広場は
面積が狭小であるから、もし馬上のデオ
ドロの銅像でも建てるならば周囲との調
和を欠くであろう。しかし會つては共和
主義の代表人物がサンパウロに多く現わ
れ、その政治運動の中心をなしたところ
から、サンパウロに一つ位のキンゼデ
ノベンプロに因む記念塔があつてもよ

うなものである。結局サンパウロは、
ブラジル経済の心臓であり、生産の都と
しての存在に過ぎないのであるか。
この点リオには、海岸を間近に控える
ブラサ、パリスの前方に特にブラサ、マ
レシャル、デオドロ、フォンセツカが設
けられ、そこにデオドロ元帥の銅像が見
られる。

あれは彫刻家モデスチーノ・カントと
オノリオ、ウニアの共作になるもので
馬上のデオドロが軍帽を振り上げて共
和国万歳を叫んでいるところを表わして
いる。この銅像をとてもブラサ、シブプリ
カに建立されるのが一層當を得たものと
思われる。

何れにせよデオドロ元帥はブラジルの
共和制樹立の大立役者であり、屋上の旗
鶏が黎明を上げるように彼の数語の叫び
によつて六十七年の君主制が終局をつげ
てブラジル共和が誕生したのである。
その「デオドロ伝」が史家マガリマン
エス、ジュニオールの麗筆で描かれ大型
フラツリア叢書として最近出版されたが
上下二冊からなる龐大なものである。
これはデオドロ、フォンセツカの伝記で
あると共にブラジルの帝政から共和制へ
の変遷史でもある。キンゼデノベンプロ
革命については、多くの歴史研究家や
著述家がその史実を辿りながら各々の見

Eletro Radio Oriente



各種家庭用電気器具類一切

テレビンール各種
ステレオ電器各種

ラシオ・レ・ノ・金庫・タイプライタ
扇風機・トランジスタ
冷蔵庫・洗濯機・電気掃除機・録音機
その外何でもあります

ガルサ市 エイトロ・ベンテアード街 一 一 番
本店 **八卷兄弟商会**
ガルサ電話ヒヒ三番・郵函ニ七九番

御注文は、バスト入市、ソッキ、テ、カンヤス街、角
代理店 **宇佐美宗一**

電話 自宅 一 二 五 番
店舗 一 六 四 番

地から共和制樹立の意義を語つてゐるが、四世紀半のブラジル史を通して僅か一日の軍部革命で当国の政治社会にあらはと大きな変化をもたらしたものはない。その革命の動機と性格は異なるとしても、重要性においてフランス革命にも匹敵するであらう。

マカリヤンエス、ジュニオールの「デオドロ伝」の概要と筆致は部分的にカールテイルの「フランス革命を思わせるものがある。」

さて、ブラジルの歴史を植民、帝政、共和制の三つに分けるとして、キンピ、デ、ノベンプロは共和制樹立の序曲である。

その共和宣言が一八八九年十一月十五日にリオ、サンタ、アンナ広場（現在のブラサ、レブプリカ）で、デオドロ、デ、フオンセツカ元帥によってなされたのであるから、今年がブラジル共和国の誕生から八十周年に当る訳だが、従つて数多いリオの広場の中でブラサ、デ、レブプリカほど名高いものはなく、あの広場が一部ブラジル史の縮図であり、多くの歴史の出来事の舞台ともなつてゐる。

このブラサ、デ、レブプリカが現在の名称のつけられたのは共和宣言後で、それまではカンポ、デ、サンタ、アンナと呼ばれ、更にその以前はカンポ、デ、アクラマンソンともいわれ執政政府の時代にはカンポ、デ、オンラと呼ばれたこともある。

カンポ、デ、サンタ、アンナに就いて当時カンポ、デ、サン、ドミンゴが広大な面積を占めていたが、この二つの広場には判然たる境界もなく、恰も一つの大原野のようであつた。

十七世紀中葉までのリオは人家がまばらに見られる程度で、サンタ、アンナとサン、ドミンゴ広場一帯は濠木の茂る湿潤地で、その附近には素封家メンデス、アルメイダとゴンザロ、ヌーネスの農園があつた。

カンポ、デ、サンタ、アンナに最初に設けられた建物はサン、ドミンゴ教会であり、その信徒の大部分はブラジル生れの黒人であつた。同教会は市街の成長に伴つて取り壊され、一七三五年度に新たに建設されたのがサンタ、アンナ教会も他に移転し、その後設立されたのがドン、ペドロ二世停車場である。

サンタ、アンナ広場は、現在のブラサと、チラデンテスを中心として、ルア、ダ、コンスチツイソン、ルア、ビスコンデタ、ブランコからルア、ウルグワイアナまで占める広大なもので、ここに於て一七九二年四月二十一日にブラジル独立革命の犠牲として、ミナス人のジョアキン、ジョビ、ダ、シルバ、シマビエル

おしらせ

カサネテ・イン・カサネテ

ブラジル生れの方も
帰化した方も

(十四歳以上、十六歳迄は父親の

アウトリザツソンが入用)

カルテイラ、イデンチダ、デー

を取得して下さい。

AVISO

御注意

旅行中、バス、汽車の乗り降り
の節、その他時提示を求められ
ることがあります。

モトリスタの免状、上級学校へ進
学の場合、すべてに必要です。

法律事務所 プレシデント街 三二二

森重五男

電話 二〇〇〇番

（チラデンテス）が絞首刑に処せられたことは、歴史に記されている通りである。チラデンテスの処刑された場所の近くにはエレメンシア、ダ、タスタス、デ、カストロ夫人の農園が所在し、そこには決山のカジュエーの樹林があつたので別称カシユ園で知られていた。

一七六三年にはポルトガルの王室直臣のVICERREI(副王)がリオに派遣され、小王政が布かれてからは、リオ市街に幾多の改良工事が行われた。その第一番にサンタ、アンナ広場とサン、ドミンゴ広場が手入れされ、此処で市民の種々の宗教行事やお祭が行われたのである。

一八〇八年度にドン、ジョアン六世がポルトガルから到着の折はサンタ、アンナ広場で市民の盛大なる歓迎会が催され、また一八二二年十月十二日にはドン、ペードロ一世のブラジル皇帝即位の宣言式が挙げられた。

その後、ドンペードロ一世の皇帝退位と、ポルトガル本国への引揚げのために執政府が設けられ、その間に於て、サンタ、アンナ広場がカンポ、デ、オランと改められたことは前述の通りである。だが、ドン、ペードロ二世の成年式挙行と共に再び改められた一八四〇年以後は、カンポ、デ、アクラマソンと称せられるようになった。

わかりやすい仏教の話 18

源 辺 謝

この前、我々が涅槃に至るための道、もう一つ申しますと、涅槃を理想とする我々仏教徒の日常守るべき道徳は、正見、正思、正語、正業、正命、正勤、正念、正定の八つの道であると申しました。さて、正見とは、正しい見解、正しい思想ということであり、この正しい見解ということも、涅槃に至るための正しい見解であります。生きるための智慧、住みよくなるための主義、主張ということではなくして、人間としての根本立場を自覚するということであり、人間としての根本明らかな見定め、自覚することによって、何ものにも、何事にも妨げ、犯かされることのない、大安心の涅槃寂靜の境に到達できるのです。安心の涅槃寂靜の境に到達できるのです。それならば、人間としての根本とは何か？これは、基本的に申すならば、諸行無常、諸法無我の道理にもとずいて、その中に生きておる存在だと知ることであり、その中に生きておる存在だと気が付き、自覚した時に、涅槃寂靜を得ることができ、るのであります。涅槃寂靜の境に至るには、この自覚以外にないというのが、こ

の正見であります。この正見の智慧を得れば、自から、世に廻る道、生きて行くための本當の正しい暮らし方がわかって来るのであります。

第二は、正思であります。我々は、第一の正見によって、涅槃に至る正しき方向を知りました。ただ知ったというだけでは、それを身に得ることはむづかしいのであります。そこで正見したことをいつも思っておれ、思惟を怠るなと教えるのであります。そうすれば、昔から言われたように「思いここにあれば、自ら表われる」で、こうしななければならぬのだという行動の意欲というものが起ってくるものであります。ですから、この正思に任しておれば、諸行無常、諸法無我の道理に反した執着とか、我見というように間違った考えから離れ、愛欲を捨てて慈悲とし、意力を制して自身を訓練することができるのであります。

第三は、正語であります。これは正しく語れということであり、私たちが人間というものは、言葉をもって、私たちが、心で思うことでも、言葉によって願います。願うことでも、言葉によって願います。これは、皆さんもご存じであります。それですから、第二の正思も先ず何よりも外にあらわれるのは、言葉として、言語としてであります。正思を

おしらせ

十一月 十五日より 十二月三十一日まで

11-15 夜間営業

12-31 御客様にプリンテ (BRINDE) を差上げます

年末特別デスコント 一〇% 二三〇%

御客様にクーパーソンを差上げます

12-24 ナタールの日に抽籤

幸運は誰に？ 五百コントの賞品はどなたに？

時計・ユビワ・宝石・貴金属

花器・オブジェ

RELOJOARIA TAKAMI

タカミ

時計店

アデマル・デ・パルロス街二一五四

バストス短歌会
創立十周年記念作品集
出版祝賀歌会

して正思たらしめろかどうかも言葉であり
ります。その正思を正思たらしめるため
には、正しい言葉、正しい言語でなければ
ならぬと教えるのが、この正語であり
ます。先きの正思において、正思するも
は、執着、我見を離れ、観てそれが愛欲
を転じて慈悲とし、意力を制して自身を
訓練すると申しました。その様な思い
かゝるならば、その言葉は、臆を言つて
たり、悪口をはいたり、へつらうとい
様なことから遠ざかる筈であります。そ
れは話を終つてからでも、人に厭な気持
も起さず、又自分自らも厭な気持を残さ
ない様になりませぬ。自他共に厭な気持
いだかず、楽しく語り合うためには、い
も相手を尊敬し、静かなやさしい言葉づ
かいでなければなりません。すると、こ
の正語ということは、自我の執着から離
れ、相手を慈しむやさしい言葉、即ち和
顔愛語たれと教えるのであります。う
お釈迦さまの御説法初期において、は
の正語ならぬ、誤つた考え、言葉遣い
によつて醸し出される人々の怨と、い
とによつて、法句経や、その他の経典
つて、やかましくいわれ、正語を
々の生活において大事なことか、とい
いられるのも、我々の周囲にうすま
争から見てうべなるかなと思われ
あります。

バストス短歌会では、発会二十周年を
記念して会員の作品集を刊行したが、歌
作品集の指導を仰いでいる酒井繁一先生
オズワルド、クルトス歌会と合
去る十月二十五日午後一時より、
森重扶美
酒井繁一
仲人を好まぬ妻も座にありて話はず
めば明るく笑えり
森重羊鈴
樹鳴らしと吹き荒れる風 宮武勝甫
弱き脚引きすり着きし友の家におわ
れつつ花材にただく 加藤ふじ
こはれ敷く蜜柑の花をかつぐ蝶夜目
に真白き道つくりゆく 信太千恵子
政治には疎き妻子もテ口団の人質の
卑劣罵り止まず
石橋美津雄
つきつめて思えば何もなき空間に思
いきり手をのばしてみる 加藤まりえ
一途馬鹿といわれるまでに励みお
われの体の歪となるまでに土井はやし
この年は順調に慈雨にめぐまれて大
地に匂う若きみどり葉 志伊良二世
わが心こめし航空便バランサにのせ
て超過と局員はいう 加藤春芳園
食堂もおろそかになり生花展終えて
次は歌会にいでゆく 園田敏子
席題 一八一一首づつ

バストス短歌会の名譽

明治神宮記念短歌大会に

牛尼陽子さん佳作二に入選

去る十一月八日明治神宮鎮座五十年記
念の短歌大会海外からの献詠を合わせて
総数二千三百二十六首、その内バストス
歌会の牛尼陽子さんが佳作の二に入選し
た。献詠歌は左の通り

我が知れる人あらぬかと新聞の
日本だよりを丹念に読む

バストス歌会からは十数年前小松修水
氏、数年前に信太千恵子さんの兩名が宮
中御教始の誄進に入選して遠く祖国日本
にまでバストスの名を知らしめた。今回
は三度目のバストスの名譽である。

下段よりつづく
○テールに飾られし葉竹桃赤し馳走
いたたく歌会の席に 加藤ぶじ

尚、歌会の席上に於て、酒井繁一先生
、加藤春芳園氏より祝のお言葉を頂戴し
、歌会を代表して森重羊鈴の謝辞があり
和気あいあいの裡に散会したのは午後
六時であった。

- 雑談も途絶えし選歌のこのしじま冷
蔵庫の音柳揚もなく 加藤春芳園
- 展示されし生花の前濁りなき人の心
にしみらに触れつ 酒井敏一
- 貴重なる一日とならむ先生の歌評は
身より消ゆることなく 信太千恵子
- 盈裁の木灰はテラスに咲きそろうい呼
び鈴押すを惜しみて見入る 森重扶美
- 無為に坐せば歳はしるし去年よりも
さほど表えしと思わざれども 藤雨
- 侍世の標準をいすこに置きこみむ夾
竹桃の切り花の美 森重羊鈴
- それぞれの表情なして歌作る車に夾
竹桃はほえむ如く 加藤まりえ
- 連らなれる牧場は新たに緑なし白き
牛群のどかし見ゆる 園田敏子
- 三十年寡婦つらぬきし叔母の庭さゆ
らく花はみな白にして 土井はやし
- 吾が耕地向から闕まで耕やして何を
蔭かむか思案する日々 志伊良二世
- ↑ 上段へ戻る

俳句おしらせ

仙人掌句会

来る十二月六日(第一日曜日)夜七時

会場 梶山米子 居

兼題 雲の峰・ハンモック・イサー

(ICSA二サウバーの雄蝶・羽根が生きて
空中をとぶ)

俳句研究会

○十一月十五日(第二日曜日) 夜七時

席題 出席者各自一題出題、競詠
会場 糸音 居

迷いユーブン

SR Mayo Hoda	Pinheiro	TE-1)
" Paulo Takashi Assano	Empreen dimentos	
" Yoshio Nagai	Banco Halles	
" Malio Kaneo Issomura		
" Satiko H. Yasuda		

外国人登録改正

これまで外国人登録、モテロー九号は廃止、本年一月から新らしいカルティラ、イデンチダーテを取得せねばならぬことになった。又、戦前に発行された外国人登録(モテロー二〇 各地警察で発行したもの)は、すでに無効である。これらに注意し、必要とするので、一般の方も規定のドクメントを所持することを忘れないようにとの事。

尚、帰化手続きをする場合にも、新しい外国人登録を必要として、且つ、連邦政府へ五〇コントス伯銀を通じて納めなければならぬことになっていゝ。

広告

RELOJOARIA TAKATA

ロードビアリオ前

高田時計店

電話 九三

年末贈答用

進級、卒業祝のプレゼント

腕時計 宝飾石
貴金属 眼鏡
万年筆 ユビワ

長崎の原爆 永井博士の手記 1

二十五年目に発掘された永井隆隊の
— 原爆救護報 —

「原子爆弾救護報告」と題するこの報告書は「第一章 原子爆弾二開スル想像」から「転編為福、新シイ幸福ナ世界ガ作ラレルナラバ、多数の犠牲者ノ霊モ亦、慰メラレルデアラウ」で結ばれる「第十章 結語」まで、臨床報告を主体として百七十三ページに及ぶ。赤いケイのはいった便センに漢字と片仮名の文章をぎっしりと書きこまれた生々しい被爆の記録だ。

表紙もボロボロになったこの報告書を今日まで大切にしまっていたのは、長崎市に住む田川福松さんである。この十月で八十歳という高齡、自身も被爆し、奥さんは焼死、九人の子供のうち五人を原爆で失った。全員「永井救護隊の治療を受けた」。

田川さんの三女千鶴子さん(元長崎海員液済会病院婦長、五十歳)は当時をふりかえって、

「二十年八月九日、長崎に原爆が落ちたあと、長井先生が三山に救護隊本部を置かれたとき、私の主人、施屋山(台湾人)も副長として参加しました。

「布を紙クズの山の中に綴じた書類があつたので手にとると、自分の名前や子供たちの名前が患者として出てくる。大層なものかも知れないと思つて持ち帰り、引出しにしまつたんです」

という。その後、千鶴子さんは、施屋山氏と結婚して、台湾へ移住した。そして、今年の五月、万国博を見るために単身帰り。

「六月はじめ、長崎放送に勤める遠縁の者がたずねてきたんですが、その時、ふとあの名簿(報告書のこと)に出てくる人たちが何人生き残っているか調べたら、テレビとしても意義があるわよ、といつて出して見せたんです」

こうして、この記録が日の目を見ることになった。

これを書いた長崎医科大学第十一医療隊は「長崎の鐘」など一連の著作で知られる故永井隆博士を隊長とする十二人。そして、千鶴子さんの夫の施屋山氏が同隊の副長というわけだが、台湾省彰化市で開業中の同氏に国際電話をかけて、報告書の一部を読み上げると、「あ、それは先生のお書きになつたものですね!。(以下次号へ)」

